

近代産業社会の終焉を前に 縮小社会とジェンダー

伊藤公雄

はじめに 世界像とジェンダー

- そもそもジェンダーとは？
- 一般的定義
- 生物学的性差 (sex) に対する
社会的に構築された性別 (gender)

文化や歴史によって変化するジェンダー
ジェンダーは社会的な構築物

スコットのジェンダー概念

- J・スコット(歴史学者)

「ジェンダーとは、肉体的差異に意味を付与する知なのである。これらの意味は、文化や社会集団や時代によって異なっている。それは、女の生殖器官も含めて肉体にまつわるいかなるものも、社会的分業をどのように形づくるかについて唯一絶対の決定を下したりはしていないからである」

性の多様性

- 性の多様性

性染色体 XX XY が多数派だが、XXXや
XYY,XO... など多様な性染色体をもつ人も
内性器／外性器 両性具有の人も
性ホルモン 日々変化する性ホルモン
性的指向 異性愛、同性愛、両性愛
性同一性「障がい」の人も

よりラディカルな視座も

- J・バトラーの議論

「『セックス』(生物学的な性差)と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に社会的に構築されたものなのである。実際おそらくセックスはつねにジェンダーなのだ」

伊藤の立場

- 生物学的性の多様性の承認と生物学的な平均的なオス／メスの差異の承認
- 社会的・文化的・歴史的に構築された性別としてのジェンダーの視点の承認
- 生物学的性差への配慮とそれを口実にした差別／排除の構造（多くはジェンダーに基づく）の廃棄

ジェンダーという用語

- もともとは文法用語

女性名詞／男性名詞／中性名詞

1970年代前後から

社会的に構築された性別の意味で普及

前近代社会とジェンダー

- 多くの文化がもっていた「世界」を二項対立で把握する宇宙観(男女の二分類と対応)
ビデオ 伊藤公雄『「男らしさ」という神話』より
- 言語におけるジェンダーはその典型
男性名詞／女性名詞はなぜあるか？
東アジアの陰陽文化
陰＝女性／陽＝男性
J・クリステーヴァ『中国の女たち』

大韓民国の国旗と国章



(国旗)



(国章)

前近代社会の男女の二項図式

- ほとんどの文化に存在
- ただし、地域や時代によって変化する男女の分類と世界把握の仕方
- 世界図式に織り込まれたジェンダー図式
- 自覚されなかった性差別

2 近代産業社会とジェンダー

- 近代産業社会の登場とジェンダー構図の変容
- 前近代の人々に共有されていたジェンダー構図(共有されていたコスモス)の終焉

近代社会とジェンダー

- 工業化・産業化の進行

当初は男女年齢を問わずに労働力に
やがて、子ども＝次世代労働力は学校へ
女性は、労働力の再生産（家事・育児・介護）
の労働への性別分業へ

産業化とジェンダー

- 近代産業社会の進行
男女間の性別による分業の広がり

男性＝生産労働＝「公」的労働＝有償

女性＝(労働力)再生産労働＝『私』的労働＝
無償労働 (unpaid work)

ト・イリイチのジェンダー論

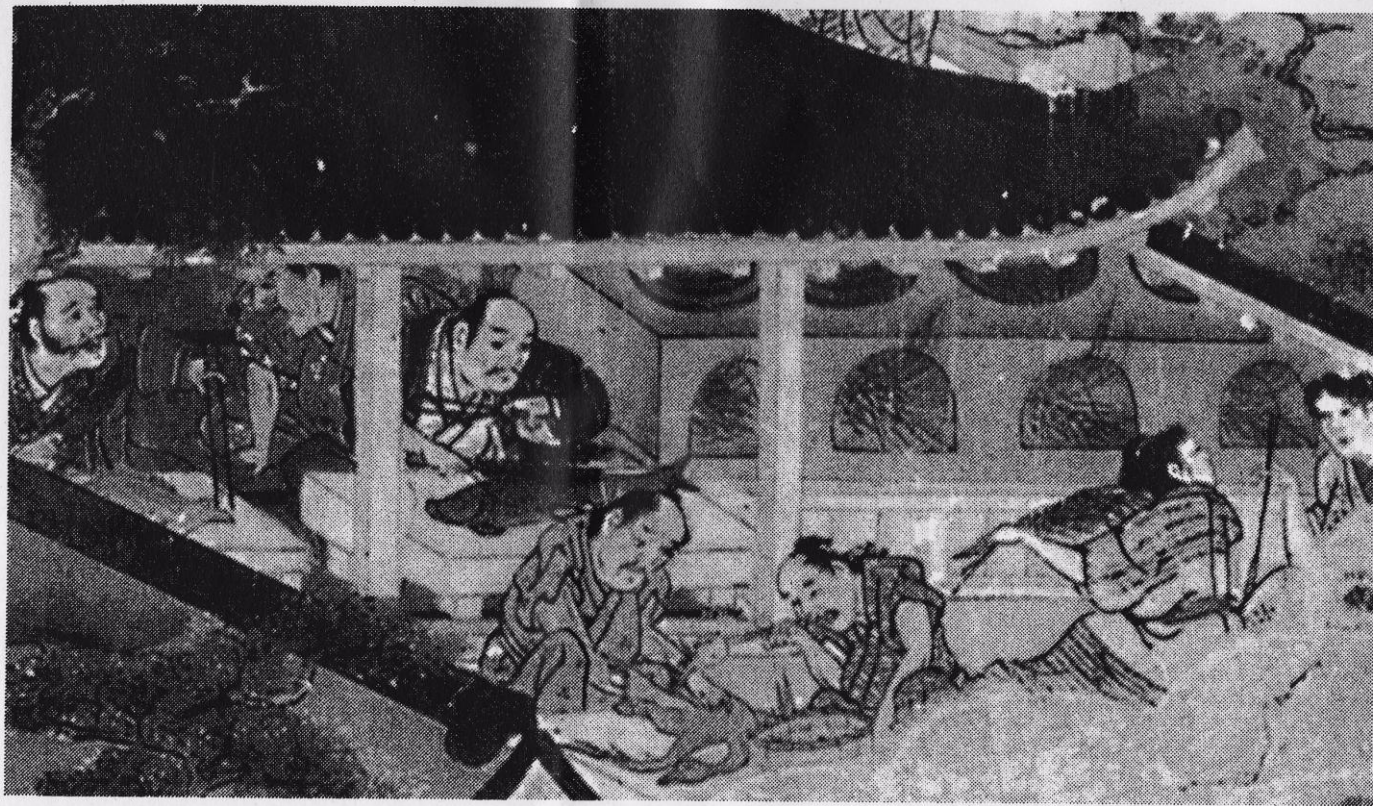
- ヴァナキュラーなジェンダーという視座
- 各地域の暮らしに根ざした、ある時代状況に独特の男女の関係

相対相補的な関係の成立

男女の役割分担(世界像に規定された)

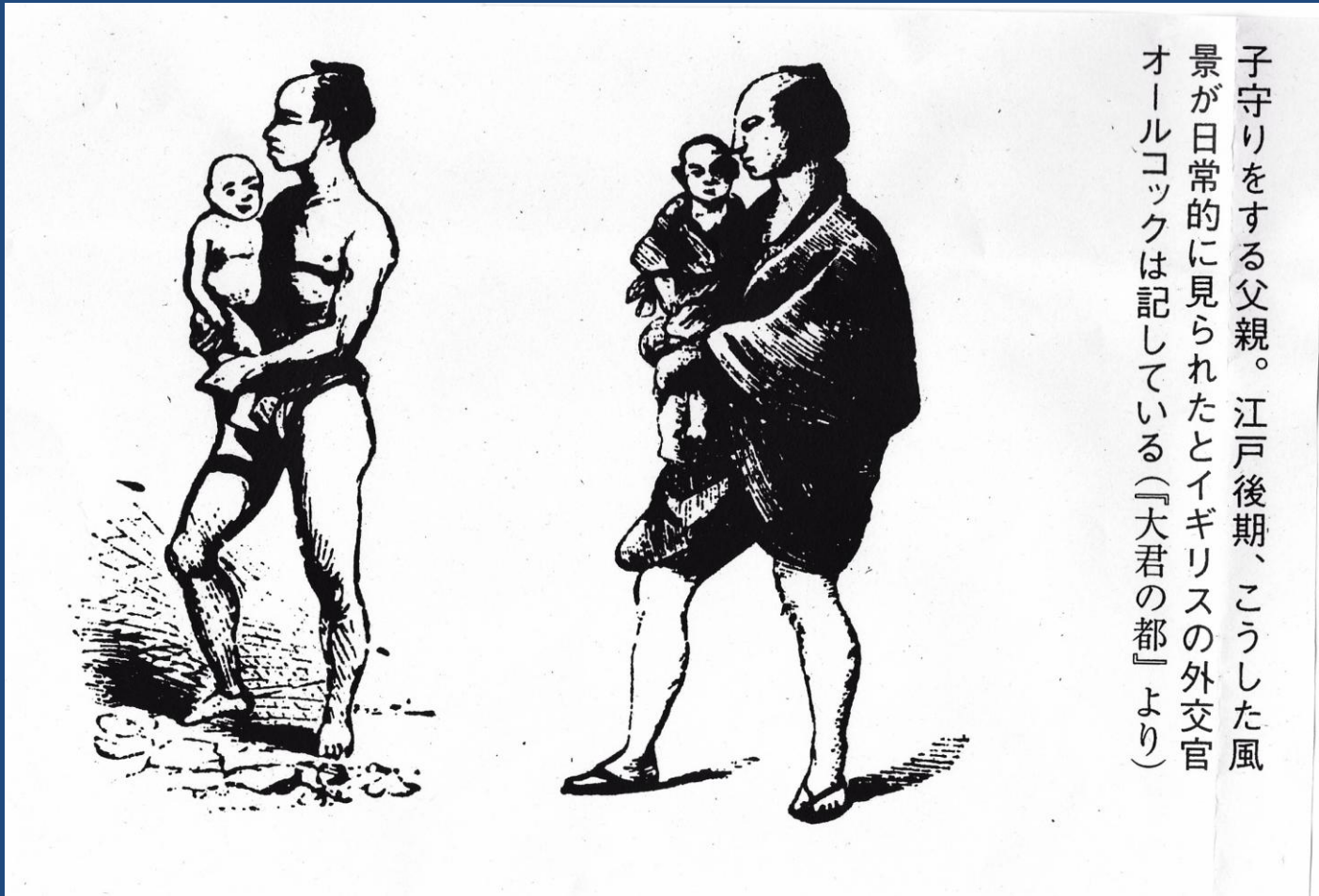
男女の相補性

料理は男性の仕事！？



料理をする男性（『洛中洛外図屏風・舟木本』
東京国立博物館蔵）

子守りをする父親



子守りをする父親。江戸後期、こうした風景が日常的に見られたとイギリスの外交官オールコックは記している（『大君の都』より）

近代社会がジェンダーを破壊

- イリイチの議論

生産性、効率、利益優先の近代産業社会

男性＝賃労働／女性＝シャドウワークの性的
二分類（経済セックス）の定着

エコロジカル・フェミニズム

- 産業社会を発展させてきた「男性原理」(生産性優先、効率優先、利益の拡大優先)に対する「女性原理」の回復
- 男性原理 理性的・能動的・競争的
あらゆる場でヘゲモニーを求める男たち
- 女性原理 感性的・共生的・平和的
自然と人間、人間と人間の共生にむかった
コスモロジカルな回復

サブシステムという視座

- 生命維持、生存のための活動
- サブシステム
=「人間生活の自立と自存」(イリイチ)

日本におけるエコフェミニズム

- 1980年代後半

エコフェミ 対 マルフエミ(マルクス主義フェミニズム)論争

- 女性原理／男性原理的な二分類は、男女の二分類＝性別分業を肯定・再生産するという批判のなかで、弱体化

2 生産性と拡大の論理

- 男性原理と資本制
- 男性主導の近代資本制
（自然と人間の）支配とコントロールの原理
コストパフォーマンスの論理
自然との共生の喪失

グローバル化と新自由主義

- グローバル化した資本の動き

実物経済をはるかに超えるバーチャルなお金の動き

市場中心といいながら

実際は、経済権力が政府をコントロール
持てる者には保護を

／持たざる者は自己責任で

ブロック化する支配構造

- の経済先進国
- 政府、経済界、官僚組織、司法、警察、メディア、労働組合・・・による権力ブロック形成
- それぞれの利害を維持しつつ、相互に依存し保護しあう仕組みの成立
- 原子カムラ

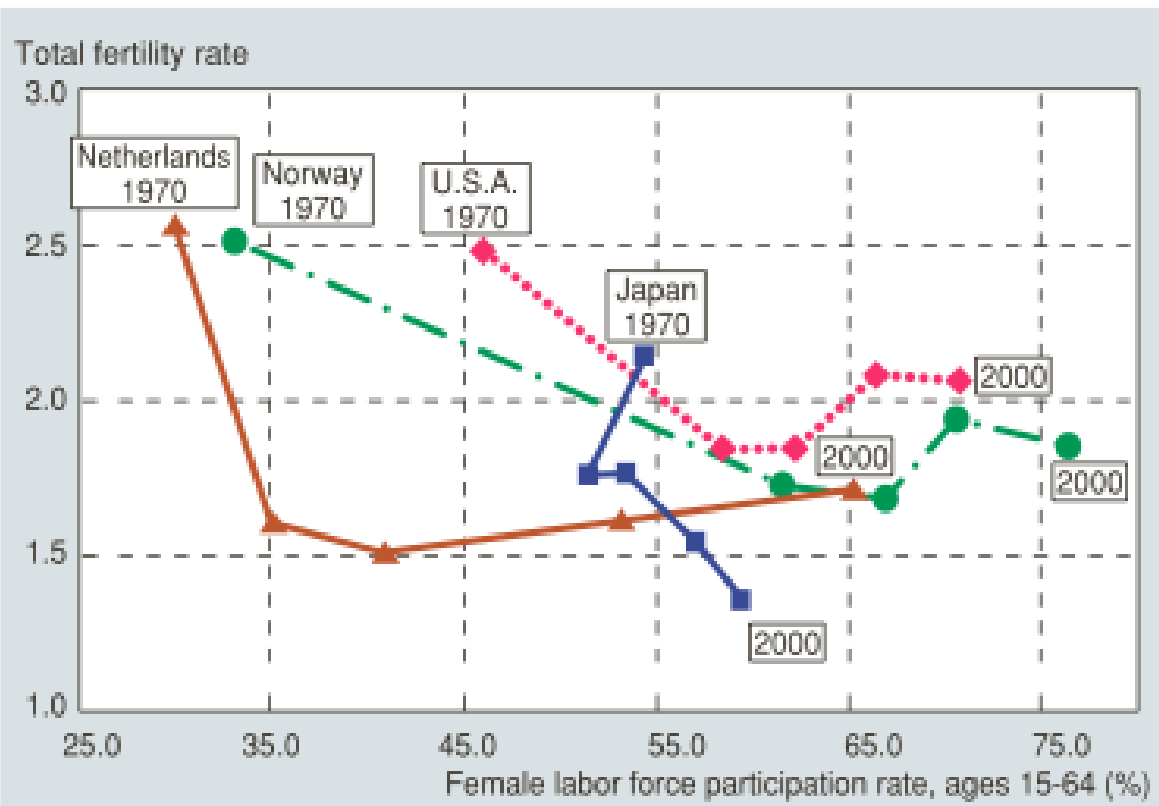
新自由主義とジェンダー

- 1970年代以後のジェンダー平等の動き
急激に進む女性の労働参加

取り残された日本社会

女性労働の拡大と日本社会

(Figure 2) Changes in Female Labor Force Participation Rate and Total Fertility Rate in Japan, USA, Netherlands, and Norway



(Source) International Comparisons of the Social Employment...

女性の労働参加なしでの成長

- 背景にあるのは男性の長時間労働
- もうひとつは、女性の「主婦化」(女性の家事・育児労働と条件の悪い非正規労働への囲い込み)

日本：週60時間労働（男性）

【図表 3-2-10 週労働時間 60 時間以上の
就業者の割合（男性・年齢別）】



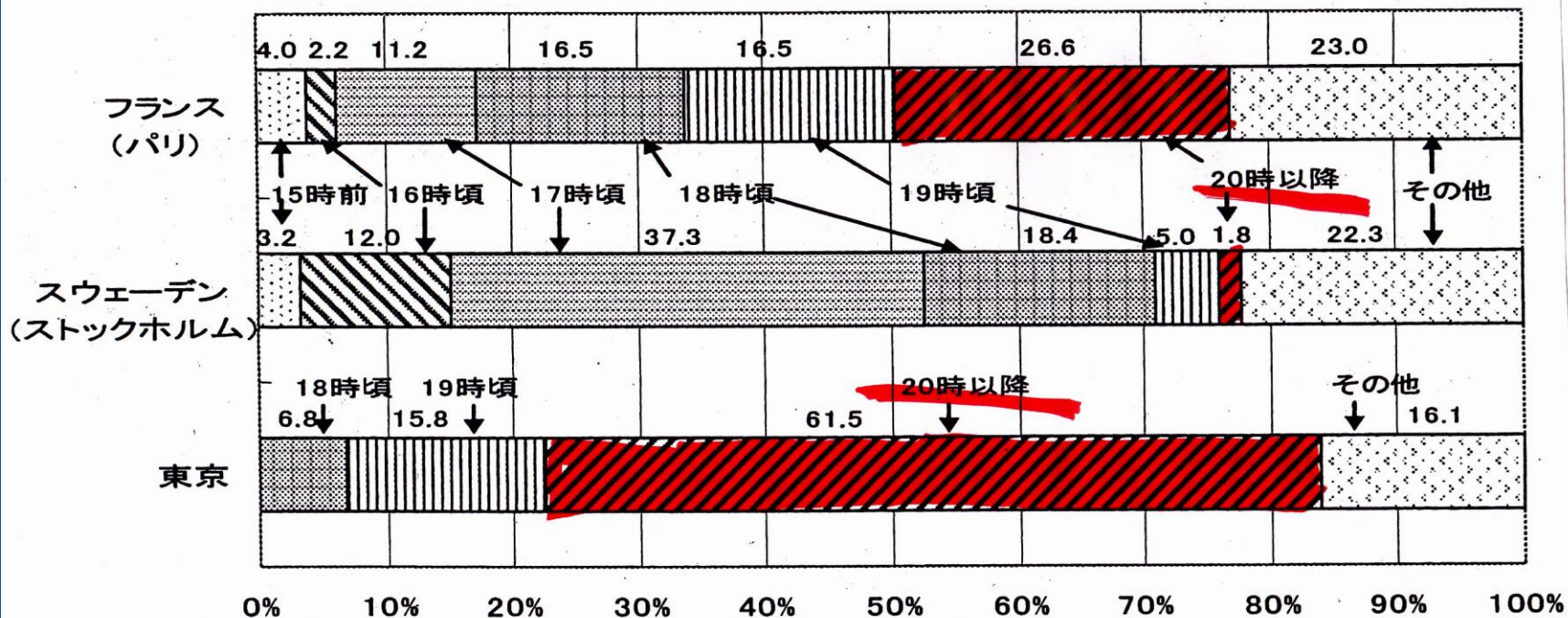
（備考）

1. 前掲「労働力調査」より作成。
2. 数値は、正規従業員数（休業者を除く）に占める割合。

男性の帰宅時間の国際比較

3都市でみた男の帰宅時間

○男性



経済成長の一方で

広がる日本社会のひずみ

- 環境破壊、地域文化の均質化
- 家族の絆／地域の絆の破壊
- 女性の社会参画の遅れ
- 男性の人間らしい生活の破壊

3 近代産業社会の終焉

- 男性主導の近代産業社会の終焉
- 行き詰まる産業社会

新自由主義とジェンダー平等

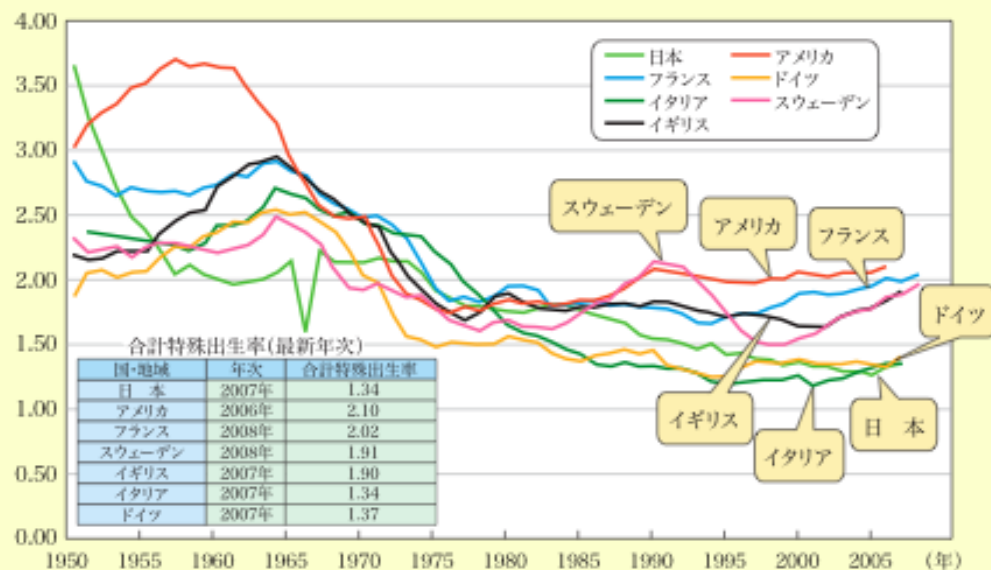
- 新自由主義は、ジェンダーに「中立」？
- 実際は、個人の能力重視（女性全体を平等にしたわけではない）。
- 「優秀な男性」並に働ける女性の活躍
- 多くの女性は、未だに条件の悪い労働に
- 男女の格差と社会全体の格差の拡大

少子社会という縮小社会

- 少子高齢社会日本
- 日独伊で進む少子高齢（「少子化＝3国同盟仮説」）

進む少子化

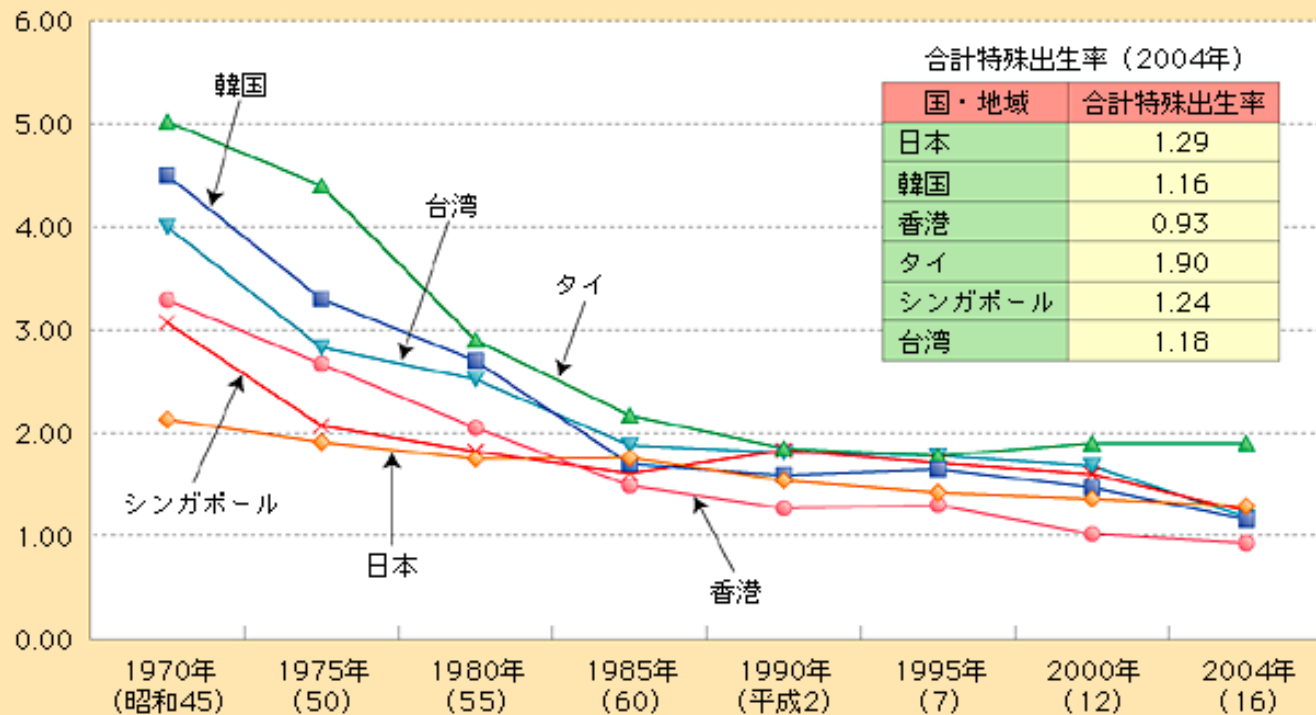
図 主な国の合計特殊出生率の動き



資料：ヨーロッパはEU "Eurostat", Council of Europe "Recent demographic developments in Europe", United Nations "Demographic Yearbook", 各国統計。米国は US.Department of Health and Human services "National Vital Statistics Report", United Nations "Demographic Yearbook", 日本は厚生労働省「人口動態統計」。

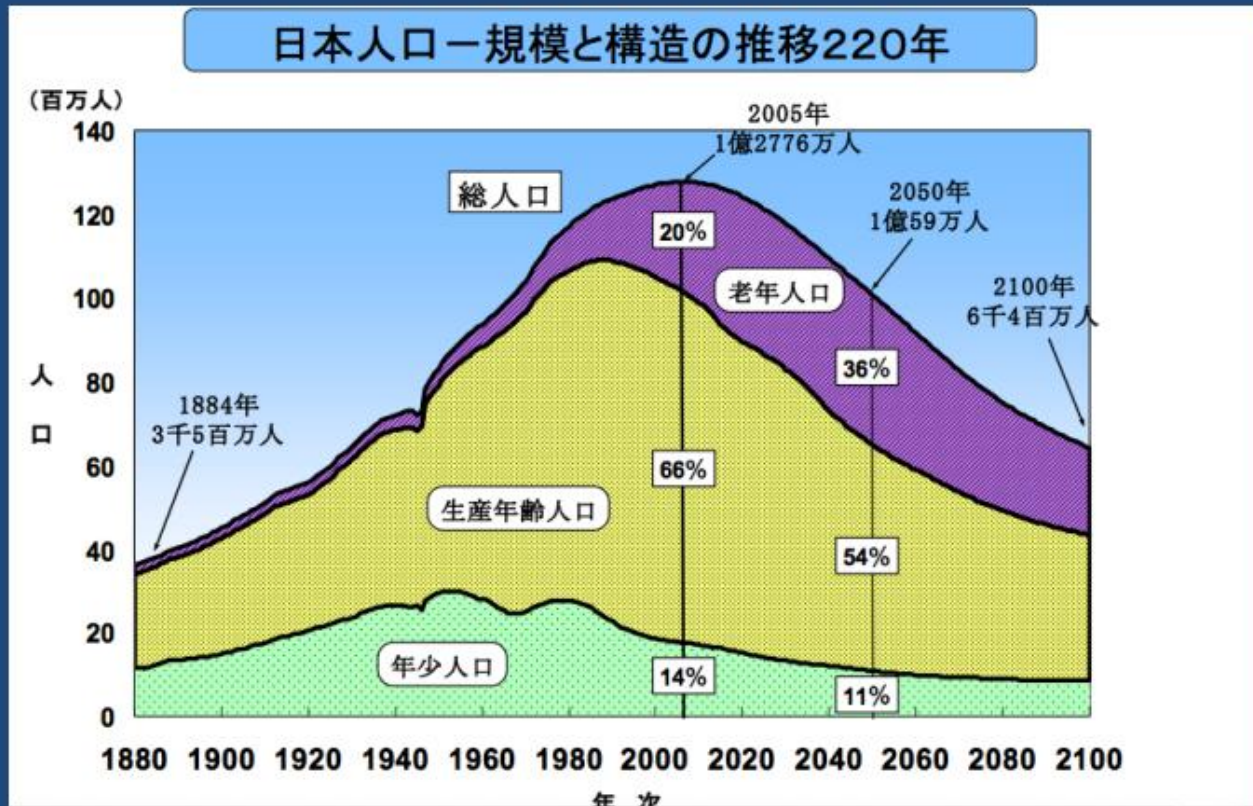
注：直近の数値等については速報値を含む。

アジアの少子化



資料：United Nations "Demographic Yearbook" ただし、日本は厚生労働省「人口動態統計」、韓国は韓国統計庁資料。香港の1975年以降は香港統計局資料、タイの1995年以降はタイ王国統計局資料、2004年はWHO（世界保健機構）資料。シンガポールはシンガポール統計局資料、台湾は内政部資料。

日本における人口の推移



日本社会のゆくえ

少子高齢社会を見据えた(前提にした)社会
構想

女性の社会参画・意思決定参画

男性のワーク・ファミリー・バランス

自然と人間／人間と自然の共生をベースにし
た社会構築

サブシスタンス(生存)に基盤を置いた社会へ